青い目のハイスクールクイーン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青い目のハイスクールクイーン

【Ｎコード】
Ｎ１５７７Ｄ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
転校生は何と外国人。彼女に一目ぼれした主人公はドライブに誘って必死にアタックするが。チェッカーズシリーズ第二十四弾。クロベエこと故徳永善也さんの数少ない作曲、メインボーカルの曲でした。

第一章

青い目のハイスクールクイーン

「いいねえ」
教室の端の席からポニーテールのあの娘を見て言う。
「あの感じ。やっぱり女の子はそうじゃなければな」
「で、どうするんだ」
彼女を見て言う俺に仲間達が声をかけてきた。
「誘うのか？」
「ああ」
俺はそう仲間達に答えた。
「絶対にな。決めるぜ」
「無理だな」
口元に黒子のある俺達のグループのリーダーが言ってきた。
「御前にはな」
「何でだよ」
思わずその言葉に抗議した。
「俺じゃ駄目だって言うのかよ」
「だってよ」
リーダーは笑いながら俺にまた言ってきた。
「あの娘だろ？」
「ああ、そうだよ」
俺はリーダーに答えた。
「それが駄目なのかよ」
「やっぱり止めておけよ」
また言われた。
「相手が悪いって」
「そうだよな」
仲間うちで一番背の高いのが口を開いてきた。

「やっぱり無理なんじゃないかな」
こいつはここじゃノッポって呼ぶことにする。そのノッポも俺に言う。
「あの娘だけは」
「何か悲観的だな、皆」
「無理もないぜ」
ノッポとは逆に背の低いのが言う。こいつはチビだ。
「あの娘アメリカ人だろ。それ考えたらよ」
「そんなの関係ないって」
俺は少しムキになってチビに反論した。
「愛に国境なんてないって言うだろ」
「歌ではそうだな」
リーダーはそう俺に返してきた。
「一応はな」
「だからさ。俺だって」
俺はここぞとばかりに皆に言う。何か自分でもかなり焦っているのがわかる。
「ここで勇気を出してな」
「玉砕か」
口髭の奴が言ってきた。こいつの仇名はそのままヒゲだ。
「特攻隊みたいにな」
「言うにこと欠いてそれかよ」
今度はヒゲに抗議した。さらにムキになった。
「俺は何があっても生き残るんだよ」
「どうだか」
しかしチビがまた言う。
「上手くいくわきゃねえけれどな」
「やってみなくちゃわからないだろ」
「まあね」
チビの弟がそれに頷いてきた。チビが四月生まれで弟は三月生ま

れだ。親御さんが頑張った結果らしい。それにしても上手くいったものだと思う。扱いは双子と一緒だ。
「それはそうだけれど」
「だからだよ」
弟の言葉に乗って主張した。
「俺だって」
「やってみる？」
色白のがとりあえずといった調子で俺に問うてきた。
「それじゃあ」
「最初からそのつもりだよ」
俺は意気満々で言い切った。
「絶対にな」
「そこまで言うのならやってみな」
リーダーもやっと折れてくれた。
「玉砕して来い」
「結局玉砕かよ」
思わず突っ込んだ。
「ったくよお」
「しかしよ」
チビがふと思い出したように言葉を出してきた。
「何だ？」
「あの娘この学校っていうか日本に来たばかりだったよな」
「ああ」
俺はその言葉に頷く。
「そうだよ。こっちに来て一週間」
「日本語喋れるのか？」
実はあの娘はアメリカ人。髪の毛は金色で目は青。鼻は高くて色も白い。そばかすが少し目立つ如何にもといった感じのアメリカ人だった。おまけに背も高くて身体つきも他の日本人の女の子とは全然違う。だから俺も今目がいってるってわけだ。

「どうなんだ？」
「そういえば」
　俺はふとそれに気付いた。
「どうなのかな」
「どうなのかなって御前」
　ヒゲが呆れた声をかけてきた。
「確かめてねえのかよ」
「どうなのかな」
「ってわからねえのか？」
　チビがそれに問う。
「まだ調べてないのかよ」
「ああ」
　少し困った顔で答えた。
「どうなのかな、そこんとこは」
「まあよ」
　たまりかねた感じでリーダーが言ってきた。
「一度声をかけてみろ。いいな」
「わかったよ。じゃあやってみる」
「けれどさ」
　弟も声をかけてきた。
「あれでしょ、やっぱり」
「英語か」
「相手がアメリカ人でしょ？やっぱり」
「そうだよなあ」
　俺はここで腕を組んだ。ついつい難しい顔になってしまう。
「けれどなあ」
「御前英語の成績どうなの？」
　白が俺に尋ねてきた。
「大丈夫なの？」
「いや、全然」

俺はその言葉に首を横に振って言った。
「この前は赤点すれすれだったんだよ。っていうかいつも」
「駄目じゃねえか、それって」
リーダーは俺の今の言葉を聞いて顔を顰めさせてきた。
「どうするんだよ、手紙書くか？」
「それもいいよな」
俺はリーダーの言葉を聞いて腕を組みながら言った。
「書いてみるか？」
「いや、それだけじゃ駄目だな」
チビもリーダーと同じ意見のようだった。
「言葉でもな」
「言ってみるって？」
「当たり前だろ、今時手紙だけでどうにかなるかよ」
思いきりそう言い返されてしまった。
「やっぱりあれだよ。言葉でも言わないとな」
「そうか」
「勉強するしかないな」
ノッポが言う。
「声をかけるんならな」
「わかったよ」
俺はその言葉に憮然として答えた。
「それだったら」
「ああ、悪いけれどな」
「俺も」
皆態度が急に冷たくなった。手の平を返すって言葉そのままに。
「英語苦手だから」
「一人で頑張ってくれよ」
「おい、皆かよ」
皆のその態度に思わず突っ込みを入れてしまった。入れずにはいられなかった。

「俺だって英語苦手だからな」
「悪いな」
「ちぇっ」
皆の言葉に憮然として首も傾げて舌打ちする。俺はかなり困った状況に追い込まれてしまった。

第二章

けれども考えは変わらなかった。俺は彼女に告白するつもりになっていた。そうなったらやることは一つしかない。俺の腹は決まった。

猛勉強をはじめた。とにかく必死になって勉強した。その結果かどうかわからないけれどテストの結果はかなりよかった。先生も驚いた程だった。

「君が成績延びるなんてな」

エラの張った中年の先生がその目を剥いて俺に言う。俺は廊下で先生に声をかけられたのだ。

「嬉しい誤算だよ」

「嬉しいですか」

「当たり前だよ。生徒の成績があがって喜ばない教師はいないよ」

笑ってそう声をかけてきた。

「だからだよ」

「はあ」

「しかしまた急にどうしたのかな」

先生は首を傾げてきた。

「この成績の急上昇は」

「いえ、まあ」

ちょっと訳は言えなかった。

「思うところありまして」

「そうか」

笑顔で俺の肩をポンポンと叩いてきた。

「一念発揮したのか」

「そうなんですよ」

とりあえずその方針で行くことにした。笑顔を作って答える。

「実は」

「いいことだよ。しかし最近」
「何ですか？」
「君感じも変わったな」
先生は笑顔でそう述べてきた。
「何かな」
「そうですかね」
これは自分でも気付かなかった。そう言われてみればそうかも知れないとも思ったがそれでも今一つ実感が沸かなかった。
「まあいい。いい方向ならな」
先生は俺のことに気付かないままいい方に誤解して言ってきた。
「いいことだよ」
「そうですか」
「何でもいい、頑張ればな」
こうも言われた。
「いいね」
「はい」
俺は強い声で先生のその言葉に頷いた。背中を思いきり押された気持ちになった。
これで俺は決意がついた。思いきって前に出ることにした。
「よし」
機は熟した。勝手にそう思った。俺は教室に戻った。この時何か考えていたと思うがそれは綺麗に頭の中から消えてしまっていた。
彼女は教室にいた。自分の席に一人座って本を読んでいる。
彼女の側まで一直線に向かう。そして。
「あのさ」
声をかけた。勝負のはじまりだった。
「時間ある？」
「エエト？」
一応は話せて喋れるみたいだった。俺の言葉に顔を向けてくれた。
「あの、時間だけれど」

「タイム？」
「そう、それそれ」
俺はその言葉に突っ込みを入れた。だが今の突っ込みにはわからないといった顔であった。
「それなんだよね」
「デスカ」
「うん、今度ね」
俺はさらに言葉を続ける。彼女に顔を向けて言う。
「ドライブでも行かない？」
「ドライブデスネ」
「そう、ドライブ」
彼女が応えたのを見て頷いてみせた。とりあえず言葉が通じたようなのでそれに感謝しながら。
「今度どうかな」
「今度、デスカ」
「そうだよ。何時がいいかな」
「何時ト言ワレマシテモ」
彼女は物凄くたどたどしい日本語で応える。俺もその相手をする。結構苦しいものがある。何か自分の言葉が通じないのがこんなに辛いのかと思った。それでも俺は彼女に話を続けてみた。一度決めたら後に引くつもりはなかった。
「日曜なんかどうかな。サンデー」
「サンデー？」
「そう、サンデー」
俺はその言葉に応えてみせた。
「今度のサンデー。どうかな」
「ソノ日デスカ」
「その日に時間ある？」
「一応ハ」
彼女はそう答えてくれた。

「アリマス」
「そうなの。それじゃあさ」
「ハイ」
「よっし」
彼女のはいという言葉を聞いて会心の笑みを浮かべた。これで決まりだった。俺は小躍りしてデートにこぎつけたことを喜んだ。そのことを早速仲間に言った。

第三章

「おい、マジかよ」
最初に驚きの声をあげたのはヒゲだった。
「本当にデートすることになったのか」
「本当だって」
俺は満面に笑みを浮かべてヒゲに応えた。
「今度の日曜な」
「嘘だろ、おい」
「いやあ、まさかと思ったよ」
ノッポが次に言ってきた。
「御前があの娘とデートなんてな」
「ああ、全くだ」
リーダーも言う。
「けれどよくやったな」
そのうえでまた声をかけてきた。
「頑張れよ」
「わかってるさ」
俺はにこにこしながら応えた。にこにこしているつもりだったがにやにやしていたのかも知れない。俺はとにかく嬉しくて仕方がなかった。
「このチャンス。絶対ものにするぜ」
「けれどさ」
今度口を開いたのは白だった。
「彼女日本語わかるの？」
「ああ、一応だけれどな」
俺はそう白に返した。
「わかるよ。ただ」
「ただ？」

「かなりたどたどしいんだよな」
視線を上にやって述べた。
「最初のやり取りもさ。かなり苦労したよ」
「やっぱりなあ」
弟がそれを聞いて納得したように頷いてきた。
「それは仕方ないよね」
「ある程度でも通じるだけましかな」
「だろうね」
弟は俺のその言葉に納得してくれた。
「彼女はアメリカ人なんだしさ。御前も英語は話せるようになったか？」
「いや、それはちょっと」
その問いにはつい首と左手を横に振った。
「テストはともかくさ。そっちはやっぱり」
「話すのは無理か」
チビが言ってきた。
「やっぱり」
「難しいよ、英語は」
俺の答えはこうだった。こう言うしかなかった。
「普通に喋るのはさ」
「無理か」
「無理じゃないけれど難しいんだよ」
俺はまた答えた。
「本当にさ。喋るのが」
「御前グラマーの方が得意か」
リーダーにそう言われた。
「リーダーよりも」
「まあそうかな」
そのリーダーに答えた。
「どっちも赤点すれすれだったけれどな」

「それでもどっちかというとそっちだろ？」
またリーダーに言われた。
「やっぱり」
「そうかも」
俺はその言葉に頷いた。
「言われてみれば」
「それでどうなんだ？」
またチビに言われた。
「御前今度の日曜日上手くいけるんだよな」
「ああ、大丈夫だよ」
不安はあったがこう返した。
「多分」
「多分ってな」
ノッポは俺の今の言葉に呆れた感じの顔を見せてきた。
「大丈夫には見えないぞ」
「一応言葉は通じるしな」
「だといいけれどね」
弟も不安な顔を俺に見せてきた。
「たまたまじゃなければいいけれど」
「そうだよね」
俺にとって腹が立つことに白も同じことを言う。何か皆が皆俺に反対しているみたいに聞こえて嫌な気分になってきた。そうしたらヒゲもだった。
「泣いても知らねえぜ」
笑って俺に言ってきた。
「それでもいいんだな」
「俺は泣いたりしないよ」
憮然として皆に断言した。
「何があってもさ」
「わかってるって、そんなことは」

「ムキになるなって」
俺がそんな顔をすると皆言ってきた。
「けれどな」
それからリーダーが話をまとめるみたいにして俺に語り掛けた。
今度は真面目な声だった。
「ヤケにはなるなよ」
「ヤケに？」
「そうだ」
顔も真剣なものにして俺に言う。
「それだけはちゃんとしろよ」
「別にそれは」
「いや、こういうのはわからないんだよ」
リーダーはかなりくどいまでに俺に言ってきた。
「言葉があまり通じないだろ？だから余計にいらつくからな」
「経験あるの？ひょっとして」
「なかったら言えないだろ」
俺の問いにはっきりと答えてきた。
「だからなんだ」
「そうなんだ。何か怖くなってきたな」
気弱になってきた。ついつい目を伏せてしまう。
「そんなのだと」
「といってもあれだぞ」
しかしここで声を穏やかにしてきた。こういうところが凄くよかった。だから俺達のリーダーもできる。その気配りが嬉しかった。
「怖がっても駄目だしな」
「切れずに、それで勇気を出してってわけか」
「落ち着いて当たって砕けろ」
またとんでもないことを言われた。
「わかったな」
「わかったよ。じゃあ行って来るよ」

「よし、行け」
こうして俺はデートに向かうことになった。約束の日曜日俺は勝ったばかりの中古の車に乗って待ち合わせ場所に向かった。免許も取ったばかりで運転も結構危ないものがあるけれどそれでも約束の場所に向かった。
けれどまだそこには彼女はいなかった。俺は誰もいない待ち合わせ場所を見てまずは遅れなくてよかったと思った。最初に思ったのはこれだった。
「よかったよかった」
それに喜びながら車を出て窓のところに立って彼女を待つ。サングラスに黒い皮ジャンとズボン、白いティーシャツで決めたつもりだ。サングラス越しにちらちらと辺りを見回しながら待っていると。その彼女がやって来た。

第四章

「オ待タセ？」
彼女を見て思わず声をあげそうになった。金のポニーテールの髪型はいつもだけれど青いジーンズの上下に白地のキャラクターティーシャツがよく似合っていた。似合い過ぎている程だった。冗談抜きで前暇潰しに見た映画のヒロインそのものだった。そのヒロインが今俺の前にやって来たってわけだ。
「いや、全然」
「ソウ、全然ナノネ」
「ああ」
俺はにこりと笑ってそう応えた。
「だから安心してよ」
「ウン、安心スル」
俺の言葉を復唱する形で頷いてくれた。それからまた言ってきた。
「ソレジャア」
「うん、乗って」
助手席を空けて誘う。
「行こうよ」
「ワカッタワ」
誘いに頷いてくれてそのまま乗ってくれた。暫くは二人で道を飛ばす楽しいドライブだった。俺も彼女もたどたどしい日本語で話をしながらドライブを楽しんだ。問題はその後だった。
ドライブが終わり近くになってドライブインに入った。もう夕方で周りには人はいない。遠い下に港町が見えていい雰囲気だ。俺はその雰囲気を利用して彼女に声をかけた。
「あのさ」
「ホワット？」
ボンネットに腰掛けて風にそのポニーテールを揺れさせていた彼

女は抜群に綺麗だった。その彼女に声をかける。シチュエーションとしては完璧だった。しかしそれは彼女のこの言葉でいきなり出鼻を挫かれてしまった。
「アッ、何？」
「うん、実はさ」
出鼻を挫かれてもそれでも俺は言った。ここまで来て止まるつもりはなかった。
「その」
「何カ？」
首を傾げられた。またしても挫かれた。
「そのさ、つまりあれなんだ」
「アレ、コレ？」
「あっ、いや」
またしくじった。これで完全におかしくなった。
「そのね、ええとさ」
「エエトサ」
「こういうこと。俺がさ」
遂に身振り手振りで言う。しかしそれも何か駄目だった。
「俺、ね」
「ユー？」
「そう、俺」
自分を指差して言う。
「俺が君をね」
次に彼女を指差す。
「指差スノハ」
「あっ、御免」
変に日本文化に詳しい。逆に俺が突っ込まれてしまった。
「それでね」
慌てて手で指し示すのに変えた。
「その、そのさ」

「園田サン？」
クラスメイトの女の子だ。勿論俺が言いたいのは園田さんの話じゃない。
「園田さんじゃなくて」
「園川サン？」
「いや、あの人でもないし」
この人もクラスメイトの女の子だ。話が余計に訳がわからなくなってきた。俺は半分位自分が今何を言っているのかわからなくなってきていた。
「だから。いいかな」
「井川君？」
「あいつでもないし」
今度はクラスメイトの男だ。納豆が嫌いな奴だ。
「クラスメイトノ話ナラシマショウ」
彼女はにこりと笑って言ってきた。もう完全に話がそっちに流れていた。
「皆ヲ知ルノハトテモイイコトデス」
「そうだね」
俺も遂に折れて応えた。
「それじゃあコーヒーでも飲みながら」
「カフェデスネ」
「そうそう、それそれ」
その言葉に頷く。こうして俺達はコーヒーを飲みながらクラスのことについて楽しく話をした。結局俺は伝えたいことは何も言えずに終わったのであった。

「それは残念だったな」
俺は次の日学校の屋上で仲間達に話した。皆パンや牛乳を飲み食いしながら話をしている。これが誰かの家なら酒や煙草もあるけれど生憎ここは学校だ。流石にそれはまずかった。

その中で最初にリーダーが言った。俺達は車座になって座って話をしていた。
「失敗か」
「ああ」
俺はリーダーにそう答えた。
「参ったよ、本当に」
「まあそうなるだろうと思ったさ」
「わかってたんだ」
「ああ、何となくな」
リーダーは俺に言う。言いながらカレーパンを食べている。
「彼女日本語たどたどしいからな」
「参ったよ、本当に」
俺はまた言った。
「全然通じないんだよ、しかも肝心な時に」
「園田さんとか井川とかか」
「ああ」
チビにも答えた。
「何で俺があいつ等の話をするんだか」
「納豆の話かね」
チビは笑いながら言ってきた。井川は納豆が嫌いだが園田さんは納豆が好きだったりする。それで仇名が納豆女となっている。本人はそれを言うと怒りだすが。
「それだと」
「その話もしたよ」
俺は口を尖らせて述べた。
「納豆の話もさ」
「ああ、彼女納豆食べるんだ」
白はそれを聞いて目をぱちくりとさせてきた。
「一応食べるってさ」
「珍しいね、あれ苦手な人多いのに」

日本人でも苦手な奴は多い。外国人なら余計にだ。あの臭いと糸を引いているのが嫌だというのだ。俺は結構好きだが嫌な奴はとことん嫌なものだ。
「美味いってさ」
それは事実だ。あの淡白さがいい。
「そう言って食べてるぜ」
「ふうん、珍しいね」
「納豆の話で全部終わりなんだな」
今度はノッポが尋ねてきた。尋ねる時に牛乳のストローから口を離す。
「結局は」
「彼女を送ってな。それでおしまい」
「何かのどかな終わりだな」
ヒゲがそこまで聞いて感想を述べてきた。
「高校生らしいって言うのか？それって」
「そうなんだろうな」
俺はまた憮然として言った。
「ホテルは何処に行こうかって考えていたのにさ」
「それはまた考え過ぎでしょ」
弟が苦笑いを向けてきた。
「幾ら何でも」
「そうかな」
「そうだよ」
他の六人の声が一度にやって来た。
「何だよ、ホテルって」
「高望みし過ぎだ」
「ちぇっ」
俺はそれを聞いて思わず舌打ちした。
「駄目か、やっぱり」
「地道にいけ」

リーダーがアドバイスをくれた。
「一つずつな。少しずつ」
「やっぱりそれしかないか」
それをあらためて思った。
「昨日で一気にいきたかったけれど」
「順番ってやつがあるんだよ」
リーダーはまた俺に言った。
「何でもな。それをわかれよ」
「切れずに焦らずにだね」
「それはできたみたいだな」
「うん、何とかね」
それはなかった。とりあえずはまともにいけた。俺もそれには自分で満足していたりする。
「上手くいったよ」
「じゃあそのまま行け」
俺はまた言われた。
「それでわかったな」
「わかったよ。それじゃあまたさ」
ここで上を見上げた。青い空が広がっている。
「彼女をドライブに誘うよ」
青い空が何か彼女の目に見えた。その青い空を見上げながら俺はそう決めた。何度でもドライブに誘って少しずつやっていくことに。

青い目のハイスクールクイーン　完

２００７・３・１１

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1577d/

青い目のハイスクールクイーン

2010年10月8日15時27分発行